
甘いお菓子とお昼寝を

L.B.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘いお菓子とお昼寝を

【Nコード】

N5737E

【作者名】

L・B・

【あらすじ】

恋人（？）同士の甘い（？）ひと時を描写。一話毎に完結。

1：尾崎みなみ

…ああ、もう！！

あつたま痛あーい！！

むかつく マジで

「ほにやしき、あたし頭痛い！」

尾崎みなみ。大学3年生、21歳。性格、最悪。容姿、自分ではキレイ形だと思っている。

彼氏、無し。下僕、一人。

ほにやしきと呼ばれた眼鏡のさえない男は、黙って薬と水を差し出す。

「鎮痛剤です。多分、みなみさんの場合、虫歯が原因だと思いますよ。病院に行ってください」

本屋敷健一。大学2年生、20歳。性格、温厚。ひよろひよろしていて不健康そうだという理由で、みなみに「ほにやしき」とあだ名をつけられた。彼女、無し。みなみの下僕扱い。

図星を疲れたみなみは、ちつ、と舌を鳴らし憎憎しげに健一を見上げる。

「う…っさいわね、何であんたがそんなこと知ってんのよ」

空になったグラスを健一に突き出す。

「だって最近ご飯食べる時物凄い形相になってますよ」

「見てんじゃないわよ！気持ち悪い」

かっとなって近くにあった雑誌を健一に投げつける。

足に雑誌をぶつけられた健一は、「あ痛。」とさして痛くもなさそうにつぶやいた。

「歯医者行くの怖いんですか…？」

健一は、まるでませた子どもを試すような言葉を吐き、ニヤリと笑った。

「ば、馬鹿にしてんの？！腹立つ！！ほにやしきの分際で！！」

健一に見下された気分になったみなみは、顔を真っ赤にしながら今度は近くにあった花瓶を健一に投げつけようとした。

「病院行く前に警察に行きたいんですか」

あわてて健一は花瓶を引つたくり、みなみから遠ざけて置いた。

代わりに健一の背中には消しゴムやら鉛筆やら定規やら、みなみが自分の筆箱から取り出した文房具が投げつけられていた。

「小学生じゃないんですから」

無抵抗のまま呆れたようにみなみを見下ろす。

「見下ろしてんじゃないわよ」

不満そうに真っ赤になって膨らませた顔をクッションで隠しながらつぶやく。

「病院行ってくつて約束してくれませんか？」

みなみは無言で首だけを縦に振った。

「本屋敷ってみなみ先輩に下僕扱いされてるよな」

「違う違う、あれ愛情の裏返し。みなみ先輩が、本屋敷に、ぞっこなんだよ」

「お前、『ぞっこん』で。他の表現ないのかよ」

「…激ラブ？」

「…お前国語成績悪かっただろ」

「うつせえな」

「じゃ、みなみ先輩に下僕扱いされてるように見せかけて実は本屋敷が手の上で転がしてんだ」

「というか懐柔してるというか」

「懐柔なんて難しい言葉知ってたのか」

「…馬鹿にしてんのか」

「恐るべし本屋敷」

「無視すんなよ」

「馬鹿にしてんだよ」

「し、しどいつー!!」

「とりあえず、めでたしで」

「え、こんな風に話進んでくの？」

「そうなんじゃね？」

「俺ら名前だけでも登場するかな」

「さあ」

「……………」

「……………」

……………

おしまい

2：菅 知枝

菅 知枝。大学一年生、19歳。性格、普通。容姿、普通。彼氏、無し。

欠けているもの、勇气。

「これってさあ、なんて読むの？」

講義終了後、一人の男が知枝に声をかけた。

男は知枝の書いた出席カードを指差している。

「何がですか」

「君の名前。下の」

ちえ？ともえ？それとも他の名前？

と独り言のように呟き、男は知枝の出席カードの名前の欄を人差し指でつついた。

「ともえ、ですけど」

特別興味を持たれる様な名前ではないと思っていた知枝は、男の質問を不審に思い、明らかに怪訝そうな顔をした。

「あ、や、ごめんごめん。深い意味はないんだ」

苦笑しながら知枝の出席カードを回収する。

「ただ、もし俺たちが結婚したら周りがすごく混乱するだろうな、

「思っ

自分の胸ポケットに挟んであるIDカードを知枝に見せる。

心理・助手：門田知枝^{かどたともし} 笹原研究室所属

「漢字だと、二人そろって門田知枝だろ？」

はは、と笑いながら回収し終えたカードをボックスに戻し、黒板を消し始めた。

菅 知枝。大学一年生、19歳。性格、普通。容姿、普通。彼氏、無し。

欠けているもの、勇気。

欠けているもの、勇気。

「こっ、ここに混乱させてみませんかっ」

知枝のひっくり返った声は講義室中にこだました。

「あ、今通ったコ」
「何？」
「1 年が『勇者』って言うてたコだ」
「勇者あ？何したんだよ」
「初めて会って、2、3言会話交わしただけの相手に」
「うん」
「プロポーズしたらしいぜ」
「ぶっ！！…プロポーズ?!」
「勇者だろ」
「勇者だな」
「braveだろ」
「ぶれえいぶだな」
「heroだろ」
「ひえろうだな」
「お前英語もダメだっただろ」
「しゃwrap」
「包んでどーすんだよ」
「しゃrap？」
「リズムに乗って喋るように歌ってどうすんだよ」
「しゃうらららーっぷ!!」
「お前がshut up!!」
「はいすいません」
「…ああ、粹外で何やってんだる俺ら」
「…な。」
「結局あのコうまく行ったのかな」

「あの笑顔がそれを物語ってると思うけど」

「お前のくせにいいこと言っじゃないか」

「お前のくせになってなんだよ」

「お前ごときが」

「よろしい」

「よくねえよ馬鹿」

「なに？！」

「……！！」

「………？！」

.....

おしまい

3：二場泰介

二場泰介。21歳、大学3年生。性格、積極的・ひょうきん。容姿、中の中。彼女、2日前に出来たばかり。

……うーん。

年上だとは思ってたけど……社会人か。

泰介はシェイクを飲みながら、目の前の女性を眺める。
空の容器が不快な音を立てる。

「いーっ!!やめてその音」

片手にハンバーガーを持ったまま女性は耳をふさぐ。

草加悦子。25歳、OL。勤務先、化粧品会社。性格、元氣ハツラツ。彼氏、2日前に出来たばかり。

「ぼめん、ぼめん」

泰介はストローから口を離さずに言葉を発した。

悦子は泰介を一睨みし、ハンバーガーをほおばる。

「言ってなかったのは悪かったと思うわよ」

うつむいたまま悦子は決まり悪そうな調子で呟く。

「え、何を？」

泰介もポテトを4本一気に口に含む。

口からはみ出したポテトを手で押し込む。

「歳よ！」

悦子の食べるスピードも上がる。

「何で？」

自分のポテトを食べ終わった泰介は悦子のポテトに手を伸ばした。

「何が！」

ポテトを奪われまいと悦子はトレイを持ち上げる。

「年。気にしなくていいのに」

泰介は仕方なく自分のハンバーガーを口にする。

悦子はトレイを持ち上げたまま泰介を睨んでいる。

「歳明かした時固まってたくせに」

「……………。ナゲット頼んできていい？」

「私、サラダ食べたい」

「じゃ俺も」

泰介が持ってきたトレイには、ナゲット・サラダ・アップルパイ・ヨーグルト・アイスが乗っていた。

「多くない？」

「多ければ多いほどいいんですよ」

悦子のトレイにサラダとヨーグルトとアイスを乗せる。
やった、アイス』と悦子は笑顔でアイスのふたを開ける。

「……俺の敵は社会人か」

「ふえ？」

悦子はアイスに夢中だった。

「俺が飽きられないように、努力しないとなってるさ」

泰介の顔が見る見る赤くなっていく。

「アイスが溶けるじゃない！」

悦子の顔も赤くなっていた。

「ああーむかつく」

「あちいあちい」

「なんなんだ隣のバカップルは」

「食いすぎだよな」

「そこはどうでもいいよ。俺も思ったけど」

「いや、あれ1日分のカロリー軽く超えてるから」

「お前家政とつてたつけ？」

「最近メタボが心配で…」

「じゃ食うなよ」

「あつやめてっ」

「キモい声出すな」

「やあーめえーろおおおお」

「低い声出すな」

「や…」

「め・ろ」

「はい、調子乗ってましたスマセン」

「…ここで男二人で飯食ってギヤーギヤー言ってる俺らって惨めだよな」

「まるでバカップル…」

「い、痛いな。静かに食おうぜ」

「……」

「……………」

「…」

「なあ」

「何」

「静かに男二人でハンバーガー食うのもかなりイタくないか？」

「それ俺も思った」

「普通に食おうぜ」

「そだな」

おしまい

[illegible]

$\vdots$

4：城木貴子

もーっ！！

あーっ！！

もーあーっ！！

やーだあー！！

シャネルの鞆を振り回しながら人ごみを抜ける彼女の目には涙がにじんでいた。

城木貴子。28歳、OL。

「お前には！！俺はっ！！必要っ！！ない！！だつてさ！！」

行きつけのバッティングセンター、専用バット、専用マシン。

次々とホームランを飛ばす彼女の周りには人だかりが出来ていた。

「またか。懲りないな、お前も」

高橋竜。28歳、バッティングセンター経営。

「あたしそんなに強くない！！」

彼女の飛ばした球は的を突き破った。

「おいっ！！言ってる事とやってる事あってないぞ！！アレ修理するの高いんだぞ！！」

「あゝ、ごめん」

「大体お前理想高すぎ！！お前が振られて被害被る俺の身にもなれよ！！」

竜は半泣きになりながら慌てて止めに入る。

「…ごめんて」

「謝って問題は解決しないでしょ。打開策を考えなさい」

竜は貴子をベンチに座らせ、蒸しタオルを貴子に手渡す。

「……………」

貴子は蒸しタオルで涙と取れた化粧でぐちゃぐちゃになった顔を覆う。

「……………相手のランク落とすとか、趣味変えるとかいう考えは無い訳？」

沈黙が数分二人を覆った。

「……………一つあった」

おもむろに貴子は声を発する。

「何」

「竜と結婚する」

竜は飲んでいたコーヒーを勢いよく吹き出した。
お気に入りの緑色のポロシャツには不気味な模様が刻まれてしまっ
た。

「馬鹿かお前」

竜は蒸しタオルを貴子から引ったくり、急いで染みを落とした。

貴子は身を起こし竜を見つめる。

「本気」

貴子の顔に涙は無かった。

代わりに顔中が真っ赤になっていた。

「…ランク落としすぎじゃないか？」

「あんだだって社長でしょ」

貴子は再びバットを手にし、コインをマシンに投入した。

「ホームラン打てたらOKしてよ!!」

打席から竜を見つめる。

「……お前それ選択肢1つしか無いじゃん」

竜の呆れた顔に、貴子は笑顔で球を待った。

「そついやこのマシン誰も使わねえよな」

「それ160キロのフレキシブル変化球だぜ」

「は?! 誰が打てるんだよ」

「...ある伝説の女性の専用コースだったんだ...」

「何だよ伝説って...え、女?」

「...彼女は数ヶ月に一度現れては泣きながらホームランを打っていた」

「どんな怪物だよ!!」

「今笑顔で客の応対してる人」

「あの人お?!」

「...何があつたかは分らんが、客から店の人になっていた...」

「...お前っ、何泣いてんだよ?」

「.....」

「もしかして好きだったのか?」

「.....違う」

「なんだよ」

「今回俺らに笑いの要素が無い...」

「そんなことで泣くな... 一大事だなそりゃ」

「どーしよう」

「次回頑張ろうぜ」

「そだな」

「立ち直り早いな」

「そかな」

「馬鹿だから」

「そだ…ってんなわけあるか!!」

「………!!」

「!!」

「………」

「………」

「………」

………

おしまい

5：沢 里佳子

「なんでなん？」

里佳子は激怒した。

まるで理不尽な王に対して「激怒」したメ。スのように。
腕組みをしたまま目の前の男を睨みつける。

沢 里佳子。 21歳、大学3年生。

「えー……っど、はは」

正座させられた男は、足の痛みで思考がうまく働かない。

「何か面白い？」

「いえ」

男は顔から脂汗をたらしながら開いた口をきゅっと結ぶ。

近藤政弘。 21歳、大学3年生。

4回目の浮気で、おとなしい（と思っていた）彼女が、キレた。

深夜のファミレスで、突然里佳子に浮気を攻められ、地べたに正座させられた。

周りの客の笑いと、カメラのシャッター音がイタい。

「どっちからなん」

「何が、あイタ…ですか」

「どっちが先に好きになったん」

里佳子はポテトをつまみながら興味なさそうに尋ねる。

「あっちです」

「…そあ」

「ハイ……」

「……………」

通りかかった店員も興味心身で耳を傾けている。

「あ、すいません。この皿片付けて下さい」

皿にはまだ沢山のポテトが残っている。

「はい、あーんしてー」と里佳子はおもむろに政弘に皿を向ける。

「ばわ…ぐっふ」

大量のポテトを一気に口の中に放り込まれた政弘は目を白黒させる。その光景を見て店員は目をまん丸にする。

「お皿、片付けてクダサイ」

里佳子は半強制で店員に下がらせる。

政弘は必死でポテトを飲み込もうとしている。

「私と、別れたい？」

突然の言葉に政弘は動きを止める。

こういうパターンでは、絶対に別れないからと言われる・又はボコボコにされてフラれる
というオチに決まっていると思っていた政弘は、自分の前に現れた選択肢に驚きを隠せない。

どう、答えるべきか。

「いつつもさ、私がなんかする度決めよったやん？今度はマサが決めて」

里佳子の笑顔に政弘は恐怖を覚えた。

目の前に提示された選択肢は、フェイクだ。

「ごめんなさい。もうしません」

「ハイよく出来ました」

里佳子はすつと立ち上がり帰り支度を始める。

政弘も立ち上がるが、足の痺れにふらつきテーブルの角で頭を打つ。

「ごわっ!!」

それを一瞥し、里佳子は政弘に言葉を吐きかけた。

「なにやってんの ポチ。行くわよ」

その言葉に政弘は目を丸くしたが、すべてを悟ったように里佳子の後に続いた。

「オイ、あの客帰ったぞ」

「お前怖くなかった？」

「皿渡されたとき心臓止まるかと思った」

「アレは魔物だ」

「ポチ、一生しりに敷かれるぞ」

「かわいそうだが仕方が無い」

「でもなんか、俺愛着わくわ」

「何か同じにおいを感じたな」

「俺らも彼女できたらしりにしかれるタイプか…」

「やだなー、『あんた、お茶』とか尻かきながら言われたときにや

へこむわ」

「炊事洗濯掃除に子どもの世話…」

「……」

「…やめようぜ。悲しい妄想」

「そだな」

「今日は俺らのバイトが深夜のファミレスだったことが読者に分かつただけで」

「満足だな」

「満足だ。」

「いつ俺たち本編に登場するかな」

「夢のまた夢だ」

「…そんな」

「…」

「…」

.....

おしまい

6：赤井絵美

「さあ、どうぞ召し上がってください。お口に合えばいいのですが」

「あ、ありがとう」

赤井絵実。18歳、大学1年生。

か、軽い冗談のつもりだったんだけどな

こんな本格的な料理つくってくれるなんて・・・

友人と訪れたレストランで働いていた男。

冗談で言った一言で、自分のために手料理をご馳走してくれた。

原田大貴。21歳、料理人。

「う、わ おいし」

何っ！！このホワイトソース！！

甘くてふんわりして心地よく重みがあって、でもこってりしてないからいくらでも入る！

「気に入っていただけましたか」

「やっバイですよコレ。めちやくちゃおいしい」

「簡単ですよ。今度レシピを教えましょう」

大貴は照れたように笑った。

つられて絵実も照れてしまう。

「・・・あ、は 作れるかな」

「女性の舌は繊細ですからね。多分僕なんかよりずっとニュアンスの効いた料理ができると思いますよ」

う・・・む、難しいな。

大貴は皿を片付けながらテキパキと机の上をきれいにする。

「もし、お腹がいっぱいでなければもう一品あるのですが」

「ぜひ!!」

よかった、とにっこり笑う大貴に、絵実は顔を真っ赤にしてしまう。

め、めちやくちゃかつこいい・・・

以前レストランに行った時、大貴はコックの着るような白いユニフォームだったのだが、今日は普段着。

黒い大き目のシャツにタイトなジーンズ、黒いくるぶしまである前掛け。

細めの体に、引き締まった腰がたまらなくセクシーに見える。

まだ若いのに、オトナだー。

「どうぞ」

絵実が大貴に見とれているうちに、大貴は二品目を持ってきた。

差し出された大き目の皿には花びらをかたどったサーモンと肉のミルフィーユ。

「わーきれい!!」

「サーモンと肉の間の緑色は大葉です。大丈夫ですか？」

「細かくなってるから全然平気!」

鴨肉・牛肉・生ハムをごくごく薄く切りにし、その上に千切りにした大葉、

その上にまた薄く切られたサーモン、が2層または3層になってい

る。

それぞれは冷たいが、鴨肉用に熱々のソースが添えられている。

「このソースは鴨肉用ですが、牛でもいけますよ」

絵実はあるんと器用にフォークで肉を掬い取り、ソースにつけてみる。

冷たいままだと、さっぱりしていて前菜、と言った感じだが、熱々のソースをつけるとまた味もずいぶん変わり、一口サイズであるにもかかわらずそれだけでメインディッシュだ。

「うわー、この差別は凄い！」

ん？何か自分でも評論家みたいになってるような・・・

「ふふ、ありがとうございます」

つられて絵実も笑顔になる。

うーん。すごいまったりしてる。

「デザートいかがですか？」

「もちろん！ところで大貴さん。何で敬語なんですか？」

皿を片付けながら大貴は困ったような顔で考える。

「んー、これ、地なんですよ。皆には落ち着きすぎておっさんくさ

いって言われますけど」

顔は若いが、雰囲気^がが落ち着きすぎていて、年を上目に見られる。

「そうなんですか」

「そうなんですよ」

「・・・どうしよう、ものすごく好きだわ、この人。
どうしよう。」

どうしよう。

どー・・・

「大貴さん！」

「はい」

大貴はにっこりと笑い返事をする。

はっ。また口が先につ

「・・・」

「どうしました？・・・お腹壊しました？」

どーしよーどーしよー

「・・・」

「絵実さん？」

ええーいつ

「・・・くっ・・・っ」

声が裏返った！！

「??」

「好きです！！付き合ってください！！」

顔を真っ赤にしてうつむく絵実に、大貴は困ったように微笑みかける。

絵実はその表情を見て、肩を落とした。

ふ、雰囲気の流れされて告白しちゃったのかな私。
恥ずかしー

何か言つてよ

「・・・デザートお持ちしますね。ちょっと待って下さい」

へ???

何それ

しばらくたって大貴はデザートを手にしてやって来た。

デザートを・・・

デザート・・・

「桶・・・ですか？」

「・・・ギャグです」

桶・・・おけ・・・おけ・・・おっ・・・け・・・

「O・K???ですか」

「はい」

「ほんとですか」

大貴は真っ赤な顔で改めてデザートの皿を差し出した。

「僕は一目ぼれだったんですよ」

皿に乗っていたティラミスは、ハート形に模られていた。

「お前の妹さ、何かオトナっぽくなったよな」

「あ？ああ、彼氏が出来たらしいぜ」

「えー！俺狙ってたのに」

「ヤだよお前なんか」

「お前と付き合うわけじゃないんだぜ」

「わかってるよ！！馬鹿はイヤなんだよ！」

「おまつ、お前苗字でてんだぜ」

「はっ、そうだった。」

「ちえ、いいよなー、ア・カ・イ君」

「苗字だけだろ」

「っはー？！俺なんて苗字すら出てないっての！ー！」

「気にすんな今度出るって」

「本トか？」

「・・・作者に聞けよ」

「ホンとか？？作者！ー！」

「・・・」

「コラ、作者？！」

「・・・」

「無視決め込んでるな」

「しどいー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5737e/>

甘いお菓子とお昼寝を

2010年11月29日08時31分発行